

## 俞平伯『長恨歌』と『長恨歌傳』とが伝える疑義」 訳注

藤井良雄  
陳 翀

(平成十四年九月十日受理)

### はじめに

白居易について話すとき、必ず触れられることは、彼の『長恨歌』であり、また、日本には白居易の作品が白氏文集として伝わり、文集中に『長恨歌傳』(陳鴻撰)と『長恨歌』とが一セットになって収載されていることである。白居易の(中唐)時代、伝奇を作る場合、歌行と傳とで制作するのが流行しており、白居易も陳鴻もそれに習って作ったとされている。それでは、どうして白居易が自分の作品ではない『長恨歌傳』までを、『白氏文集』に収載したのか。このようなことが現代でも合理的に論述されておらず、疑問であったが、その一回答がすでに一九二九年、『小説月報』二月號に掲載されている俞平伯のこの論文によって示されていた。『長恨歌』と『長恨歌傳』とに関する無視できない説得力あるものなので、大学院での演習に取り上げて翻訳稿を作ってみた。以前『白楽天の牡丹詩』(福岡教育大学国語科研究論集 第三五号 一九九四)という小論を著したとき以来、続いていた長い間の懸案であつてこのたびようやく完了したので、諸賢の御叱正を乞う。

本論文の題名について、すでに『長恨歌』と『長恨伝』についての疑問(『白居易研究講座』第二巻「長恨歌の主題に関する議論」中)と

いう翻訳題目をつけて指摘している記事が見られるが、われわれはそれを踏襲せずに、『長恨歌』及『長恨歌傳』的傳疑」を『長恨歌』と『長恨歌傳』とが伝える疑義」として揭示する。一九二九年発表の俞平伯のこの論文の主旨が論文題目に示唆されており、それを正確に再現できるようにと考えるからである。

さて、日本の南北朝時代の兵乱を描いた歴史物語に『太平記』があるが、そこにも有名な馬鬼の兵変についてのべるところがあり、楊貴妃の最後について「玄宗ハ力無クシテ、御貌ヲモ拾サセ給ハズ、臥シ沈マセ給ヒシカバ、今ハノキハノ御有様ヲ、マノアタリ御覽ゼザリシコソ、中々絶エヌ玉ノ緒ノ、長キ恨トハ成リニケレ。」(太平記卷三)と記している。つまり、長恨歌や長恨歌傳とおなじように、玄宗も楊貴妃の骸を確認できていない。このことに纏わる馬鬼に近い「仙遊寺」で聞かされた疑義を、『長恨歌』と『長恨歌傳』とが一セットで伝えているという論旨を本論文が史上初めて開陳している。また、俞平伯は翌一九三〇年九月に、「王漁洋から楊貴妃の墓に言及する」という文章の中で、山口県に「楊貴妃墓伝説」があることを友人が手紙で知らせてくれたと述べており、自説に「小補無きにあらず」としている。さらに、一九八〇年代になって、本論文の再評価が起こり周良煦氏や孫次舟氏らが本論文に言及

している。この翻訳も再評価と日本への紹介を兼ねることができればと、望外の幸を願うものである。

(藤井良雄)

### 「長恨歌」と「長恨歌傳」とが伝える疑義

俞平伯

昔、元人の雜劇『秋夜梧桐雨』<sup>註</sup>を読んだことがあるが、馬鬼<sup>註</sup>の変のことについては、楊貴妃<sup>註</sup>の死体が軍馬に踏みじられ、収容埋葬することさえできなかったと記しているものの、言葉<sup>ことば</sup>を濁<sup>く</sup>しており、牽強<sup>こじつけ</sup>の深いものであった。洪昇の『長生殿』<sup>註</sup>になると、ただ尸解<sup>註</sup>のやり方で片付けており、改葬のときになっても、「惨悽悽」として一匡<sup>註</sup>の空墓、杳冥<sup>註</sup>として玉人何処へ行かん」とひととおり歌うだけだった。両劇ともにこのシーンについて描くところは、曲筆となつてゐる。但し、『長生殿』「雨夢」の一段で新説が生み出され、この事を夢に託して、歌行の詞があり、次のように言つてゐる。「只だ當日個の乱軍中、禍殃に慘遭せしが為に、悄地人叢裏に向いて、粧を換へ隠れ逃れ、此れに因つて上より流落し久しく蓬飄せり。」そして、ある評論家が「才情が枯れつきる所、忽ち幻想が生じて、誠に水窮り山尽きるの境地、座したまま雲が湧き上がるのを見る素晴らしさがある」と評した。洪君のこの作品はただ描き方が狡猾で、筋の曲折によつて格好を作るだけで、ことさらに深意はなかった。但し、私から見ると、此の説が恐らく『長恨歌』と『長恨歌傳』の本旨を継承したものであろう。これからあと私の見解を一応述べるが、立証の証拠が少なく、定論となるのは難しいのだが、しばらく言えることだけ言うので、聞くことだけ聞いておいてくだされば、全く価値がないとは言えないだろう。

もし意のままにざつと読めば、『長恨歌』は味気もない、『長恨歌傳』

のことはさらに蛇足である。『長恨歌』の中で、修辭に凝らず、簡明直截に述べるだけで、婉曲の思いや凄艶の文も少なく、『琵琶行』、『連昌宮詞』と比べても見劣りがする。その上、陳鴻が『長恨歌傳』を作つてゐるが、『長恨歌』と殆ど同じことを繰り返し、どうやら一言でも再言してもただ繰り返すばかりで、(何故なのか)このわけが理解し難い。そもそも、一代の名手が一代の伝説を劇的な物語として書き出すと、必ずこの世のものとも思われなような構想や雄大な表現を文壇に流布するものだが、今残つてゐるものから見ると、極めて凡庸で、もたもたしている文章に過ぎない。世間の期待に應えていないのは、一体どうしてなのか。

この中で、さらに注意しなければならないのは、馬鬼の変のことである。実はこれが物語の中心となつており、楊貴妃が縊死させられた以後のことは、全部余計な文章である。現在の私達の作文法からいえば、当然先ず、筆墨を尽くして楊貴妃が玄宗からもらつた恩寵や權威を並べて述べて、彼女が遭つた悲惨や苦しみ<sup>註</sup>のことを次第に力を入れてできるだけ細かく描いて、さらに感歎、或いは諷刺を加えると、『長生殿』「彈詞」のような描き方<sup>註</sup>のようになり、これなら適当な描き方といえる。ところが、『長恨歌』と『長恨歌傳』から見ると、全くそうではない。馬鬼坡の段まで描いてゐるところは、まだ全編の半分に過ぎず、その後は臨邛道士の行跡や海山樓閣の遺跡のことについて、繰り返し述べており、これは現実<sup>註</sup>に存在していないものである、しかし(文の)書き方が非常に確実で、かつ釵盒(髮簪)の返還と秘密の誓言のことから方士が楊貴妃に会つたことが証明されている。だが、そもそも楊貴妃はすでに馬嵬坡で死んでゐるのに、方士がどこで彼女に会えるのだろうか。神仙のことは、十中八九寓言であるが、どうして香山一老(白居易)が本当にこん

なことを信じたのだろうか。そうではないと明かに分かっているのに、却ってわざわざ文章を書き、これを証明するのは、一体なぜなのか。

このことから、『長恨歌』と『長恨歌傳』の本意は、別にあると分かる。およそ一篇の文が必ず警策であり、例えば、白居易『琵琶行』は「同じく是れ天涯淪落の人、相逢ふは何ぞ必ずしも嘗て相識らん」を主旨としており、韋莊『秦婦吟』は「一身の苦しみ何ぞ嗟くに足らん、山中更に千萬家あり」を主旨として称しているが、ただこの長恨歌の主旨は、何回読んでも判り得なかった。やむをえずして言うなら、ただ「天長く地久しきも時有りて尽き、此の恨 綿綿として絶へる期無からん」の句を主旨としてとらえるしかない。「長恨」を文のタイトルとして名づけている以上、この両句は当然画龍点睛の筆となるべきである。ただ、こういう風に見ても、やはりまだ確かに非常に不明なところがある。「此恨、縣懸」といい、「長恨」という、一体何を恨んでいるのか。もし、突然に惨劇にあつたことを恨とすれば、馬嵬坡のところまでに書けば十分であるのに、どうしてわざわざ臨邛道士と玉妃太真とを仮設する必要があるのか。さらに髪釵を割り渡すことに託して楊貴妃とおつきの侍従たちのことまで語るといふ仮説が必要なのか。どうやら馬嵬坡のことはまだ恨とするほどのものではないようであるが、しかし、天人（運命）が二人を阻んだことを恨むべきものとするのは、どうしてなのか。

『長恨歌傳』の文末に、「夫れ代に希なるの事、出世の才の之を潤色するに遇ふに非ざれば、則ち時とともに消没し、世に聞こえず。（白）樂天、詩に深く、情に多き者なり。試みに為に之を歌へ、如何」と。樂天因つて『長恨歌』を為る。意ふに、但だ其の事に感ずるのみならず亦た尤物を懲らしめ乱階を空（あきら）めて將來に垂れんと欲せしなり。歌は既に成り、（陳）鴻をしてこれを傳へしめんとす。世に聞かざる所は、予、開

元の遺民に非ざれば知るを得ず。世に知る所は『玄宗本紀』在るあり。今、但だ『長恨歌』を傳ふるのみと爾云ふ」と。

ここで、この歌（長恨歌）を作った本意をはっきりとさせている。一つは主として事件に感嘆すること、次は諷諫である。ただし、この事件が真実でなければ、感嘆もありえないであろう。従つて、そこには必ず明白に実在していたことがあり、寓言に託しているものではない。後世の人々に対して大きな諷刺となるように文章中で言っているのに、この事はおそらく醜態であり、風流で上品な話ではなかった。樂天（白居易）は唐の詩史に残るほど評價があり、不世出の才能を持つ人が世に稀な出来事を記すといわれているが、どうして豪奢を羨んだり、男女のことを描くのを自慢話にするのだろうか。平面的に話を並べ立て、そのものズバリと述べるのは、正視すべきものでなく、これはいわゆる淫乱放縱を誇張したものであり、醜態さを風流として描いたものである。留めおいて判断を下していないのは、その意味が自明だからである。陳鴻が『長恨歌傳』を作ったのは、ただ後世の人々がこの点について分つてくれないうのを心配して、ずばりと喝破するためであつた。

『長恨歌傳』を作った理由は、ここですでに明言されている。もし、非常に珍しい事件でなければ、一つの歌を作るだけで十分である。あるいは一つの伝を作れば十分である。初めから歌の伝を作る必要はなかった。（そうしたのは）屋上に屋上を重ね、床の上に床を重ねおくようなことだ。いくら事が珍奇でも、たとえば歌の意味がすべて尽くされて、かつ、わかりやすければ、伝が作られなくても十分である。ただ、この二つの点についてはなおざりにできない。これこそ『長恨歌傳』が作られた理由なのである。これから三段に分けて述べてみよう。歌を作った本意は、『長恨歌傳』がなければわからない、これが第一である。事情

がはつきりしない所がたくさんあって、散文で述べるほうが比較的わかりやすい、これが第二である。伝奇<sup>伝奇</sup>という文体は、当時まさに流行しており、それで伝布しやすい、これが第三である。この中で最も注意すべきものは「世に知られていないこと」以下の数語であり、その意味は次のようだ。当時の秘密は、私が自ら見聞したわけでなく、知りようがないが、人々皆が玄宗・貴妃のことに關して知っているようなことは、正史に記載されており、あえて言うまでもなく、ただ『長恨歌』の中に記載されたこの一段の異聞を述べただけのことである。要するに、白居易、陳鴻の二人はただ自分が聞いたことを記しただけで、実際正しいかどうかは、二人とも開元の遺民でないから、知りようもなく、まして今日私の代においてはなおさらであろう。私もただ『長恨歌』について解釈しただけである。一体歌の本意はこうなのかどうか、また、他の書籍から証拠を挙げることもできないので、私はただ自分の考えについて述べるだけである。

『長恨歌』の主旨は、第一句ですでに明らかであり、すなわち「漢皇重色思傾国」とは、玄宗は楊貴妃を裏切らないが、国を裏切ったということである。門を開いたらすぐ山が見えるように(中間のことを抜きにして)すばりと本論に入って、言い下した言葉が老練かつ辛辣である。事件の経緯を叙述することに至っては、たとえば華清宮・馬嵬坡のことはすべて引き立つように書きそえるやり方である。というのは、このようなことはすでに『明皇本紀』に記載されて、世間一般にひろく知られているものだから、言いたい感想は必ず別にあって、ただこれだけのものであるはずがないから、陳鴻の文末の言でやはり明らかになっている。歌の文末のいわゆる「此恨綿綿」という、タイトルのいわゆる「長恨」という、これらは国家の遺恨であるが、玄宗・楊貴妃の私情にとつては

何の遺恨でもない。楊貴妃は仙女になって去り、その結果「天上人間會相見」である。これはお互い愛情が美しく結ばれることなので、どのような恨があるというのか、どうして長恨があるのか。白居易の描写する言葉を考えると、繁華を描く言葉は肌理が荒いようであり、楊貴妃と仙女たちとを記す言葉は猥褻に近く、雅語はないわけではないが、故意に貶めている。『長恨歌伝』には白居易が詩に深い造詣があると記されており、これからでも誠に確かなことである。總体的にこの文章をみると、構造が粗いようであるが実は緻密であり、拙劣なようであるが実は巧妙である。言葉は鈍重なようだが実は空虚である。この(ロマンス)事はめでたいようで実は見醜いものである。弦をかきならし人々から長恨歌を歌われ出して千年にもなっているが、(作者の本心が)すべて古人に見逃されているのは、ほんとうに残念なことだ。

佐証が乏しいが、これから本文でこの考え方を明示することにした。この篇の冒頭の四句が史筆である。「漢皇重色思傾国」は、自ら滅亡を招くことだ。「楊家有女初成長、養在深閨人不知」は明らかに実在する人物の面前で出鱈目を言い真実を隠していることであり、史書では開元二十二年(七三四年)の冬の十二月に壽王妃・楊氏を冊立し、天寶四年(七四五年)秋の七月に壽王妃・韋妃を冊立し、八月に楊太真をもつて貴妃に冊立したことが記載されている。楊貴妃が壽王妃となつて十年あまりの長い時期を経て、やつと玄宗の嬪に冊立された事実にも関わらず、敢えて「初成長」、「人未識」と詠じているのは、ひどく貶しめていないとすればなんであろうか。たとえ忌避のためだとしても、皇帝として尊者であることを忌避するものなら言葉を濁すべきであり、どうしてわざと事実と反することを述べるのか。今、わざわざこのように書いているのは、ただ後人に見逃されるのを恐れているだけだ。さらにこの言い方

は『長恨歌伝』と矛盾している。『長恨歌伝』は次のように述べている。「高力士に詔りし、密かに外宮を捜さしめ、弘農楊玄琰の女を寿邸に得、既に笄なり」と。この中にも曲筆がある。たとえば、寿王妃といわないで楊の女といっていること、すでに嬪になったことは云わないで成人(笄)したといっていること。これでは、外宮と深閨との差異があまりに甚だしすぎるのである。また読者が「或いは宛轉たる蛾眉」の句から、楊貴妃が馬嵬坡に死んでないと疑がうのならば、文義において矛盾するから、このことでたとえるように請うたのだといえる。この両語(初長成・人未識)を見て、文字どおりに解釈できるものだろうか。

であれば『長恨歌』中には確かに微詞曲筆があるが、一人や二人の個人的な私見からこじつけていっているのではないとわかる。以下に述べることは(白居易の)こじつけるところをあら探しするものではない。上半節で、事件についての記述に全部諷刺を含んでいるのは、周知の事実であり、ただその関係について説明していることは少ないので、先ず馬嵬の変について述べるところを見てみると、歌には次のように云う、「六軍不發無奈何、宛轉蛾眉馬前死。花鈿委地無人收、翠翹金雀玉搔頭。君王掩面救不得、回看血淚相和流」と。『長恨歌伝』には次のように云う、「上免かねざるを知るも、其死を見るに忍びず、袂を反して面を掩い、之を牽き去らしむ。蒼黃展轉として、竟に尺組の下に死す」と。その叙述には同じ点が二つあり、注意すべきである。

(1)、『長恨歌伝』では、玄宗が楊貴妃の死を見るのは忍びなく、兵士に命じて彼女を連れ去れといっており、楊貴妃の死そのものは、玄宗が自分で確かめていないわけである。『長恨歌』には「君王面を掩う」という言葉があり、これについて、白居易、陳鴻二人の説は同じである。

(2)、『長恨歌』に「宛轉蛾眉馬前死」というのは、つまり『長恨歌

伝』の「慌てふためいている間にととうとう尺組の下に死んでしまった」のことである。「宛轉」とは展轉と同じことであり、『長恨歌伝』の言う意味は極めて明白である。慌てふためいていることは、とりわけ慌ただしく乱れているようであり、結局尺組の下に死んだ人と、長恨歌の馬前に死んだ蛾眉とが、一体楊貴妃であるのかどうか、だれもわからないだろう。しかも、玄宗はもとと着物の袂を顔に被せて、見ないようにしているので、確かに楊貴妃の死を見てないのである。(このことからすると)『長恨歌』の中の「花鈿」の句には、何か隠された意味があるようだ。この両句は文法にそっていえば、花鈿・翠翹・金雀・玉搔頭は、地に散乱したままでだれも収めていないはずのところである。詩の中にこういっているのは、音律に合致させるために倒置しただけである。諸々の装飾物が狼籍して地上に散乱しており、人が蟬の抜け殻のようにたち去ってしまったようだ。『太真外伝』には次のように云う、「貴妃の死日、馬嵬の嬪、錦襦襖一隻を得て、相遇する過客に一回賞翫せしめ百錢を貰い、前後してつづけて無数の金を獲得す」と。ただ装飾品だけでなく、錦織襦襖さえ片方なくなってしまった。ここで何か異変がないはずがない。もし、正史に記されているようであれば、高力士に命じて仏堂で貴妃を絞殺させ、死体を驛庭に置いて、陳玄禮たちをよびいれて見せており、その状況はこのようになるはずがない。

私の考えでは、当時、六軍が崩壊して(反乱が勃発し)、楊貴妃が直ちに辱められて、必死に抜け出すように反抗したが力が尽き、それで金釵や花鈿が地に散乱して、錦織襦襖さえ脱げ落ちてしまったのだろう。玄宗が顔を覆い隠し背を向けたままなので、楊貴妃が生きているのか死んだのか、わからない。詩の中にはっきりと「救不得」と表現していることからみれば、則ち死を命じる詔旨は、絶対にありえなかった。

『長恨歌伝』には「(兵士に)命じてつれてゆけ」と述べており、おそらく連れ去った事実があるが、死なせたのか死なせていないのか分らない。後人は馬鬼のことを言うたびに、みな三郎(玄宗)が楊貴妃の情を裏切ったと誹るが、実は冤罪である。彼女はすでに行方知らずになっただけで、替死鬼(身代わり)を探さなければならず、そのために「蛾眉」(宮女一人)が災難に陥った。これで上の君王へ返事もできるし、下の六軍を安定させることもできる。驛庭に置いて皆に見せた死体は、おそらくこの宮女(蛾眉)であろう。一方、陳玄禮は楊貴妃を見分けられるはずなのに、どうして黒を白というようなごまかしができるのか。陳玄禮は自身が兵変に遭遇して乱兵を取り仕切れないので、知らんぷりをして、ごまかしてしまったのではないかと、これも考えられることである。死体を並べて皆に見せることは確かにあったが、この(楊貴妃が死んでいない)説を論破することはできない。『太真外伝』では彼女の死についてかなり詳しく述べており、(外伝を作った)樂史は宋代の人で、確かに彼の説が後に起こっているが、殆ど正史から演繹されたものである。

楊貴妃が死んだと聞いても、玄宗には自ら確かめる力もすでに無くなつており、後に皇宮に戻つて、楊貴妃を改葬しようとする時、始めて彼女が実は死んでいないことが証明された。改葬のことについては、『長恨歌伝』には一語も取り上げられず、一方『長恨歌』の方にはつきりと言われている、「馬嵬坡下泥土中、玉顔不見空死處」と。そもそも馬嵬坡で楊貴妃の玉顔が見つからないと云うのは、まだ通常の追悼の口調のようにだが、ここでは泥土の中に玉顔が見つからないと云つており、死体が元々ないと同じ意味で、これは怪しんでも怪しみきれものではない。後人はこのことについて解釈できず、口実を設けて、筋肉皮膚(死体)がすでに解けて消えたと云つたり(『太真外伝』)、乱軍に踏み潰された

といったり、尸解といったり、実際は牽強(こじつけ)深く、事実と合わないのである。私の考えでは、『長恨歌』は両段に大きく分けられ、冒頭から「東望都門信馬婦」までを前段とし、「帰來池苑皆依舊」から最後までを後段とする。ならば、この両句は実に前後両段の大きな力ギである。死体を捜しても探しきれず、そのため臨邛道士が天に昇り地に下りたということが、文章に描かれている意味があるはずだ。実際には、玄宗は密かに使者を派遣して楊貴妃を訪問させているし、「臨邛道士鴻都客」とは、ただのこじつけなのである。『歌』に「漢家天子の使」といい、『長恨歌伝』では「使者」といつているので、この意味が証明できる。

この(道士の)訪問の行方をみると極めて怪しい。『長恨歌伝』には、「方士乃其の術を竭して之を索むれども、至らず。又能く神を遊ばし氣に馭し、天界を出でて、地府に没して、以て之を求むれども見えず。又傍く四虚上下に求め、東は大海を極め、蓬壺(島)に跨り、最高の仙山を見るに、上は樓閣多し、西廂の下に洞戸有り、東に向ひて其門を闔ず。署して玉妃大真院と曰ふ」と。『長恨歌』では、「排空馭氣奔如電、昇天入地求之徧。上窮碧落下黃泉、兩處茫茫皆不見。忽聞海上有仙山、山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起、其中多綽約仙子。中有一人字太真。雪膚花膚參差是」と。最も不可解なことは、黄泉にも碧落にもその行跡がなく、何と海中の山に見つかったことである。人が死んだ後、亡霊となり、黄泉に住むべきだが、いくら詩人の筆といっても、絶代の美人を沈倫させるに忍びなければ、碧落に昇らせることもできるはずなのに、どうして海中の山でなければならぬのか。その上、『長恨歌』、『長恨歌伝』の主旨が共に明晰であり、『長恨歌伝』では傍く四虚に探して求めているというが、彼女が昇仙や亡霊となっていないのは明らかで、やはり、俗世に住んでいるのだ。『長恨歌』で、「兩處茫茫皆不見」と云い、

意味もまさに同じである。「忽ち聞く」から以下の句は特に注意すべきで、「海上に仙山あり」から、「花貌参差として是なり」まで、これはすべて方士が聞いたことである。もし、楊貴妃が本当に仙山に住んでいるならば、一体誰が彼女に会い、誰が云うだろう、誰が云って誰が聞いたのか。どうして『長生殿』のように天孫が楊通幽に話すことがあろうか。そもそも「馬嵬坡下泥土中」とは、すでに彼女の遺体を失ってしまった、碧落にも黄泉にも彼女の魂魄を見つけられず、海中の山に身を寄せている楊貴妃は、仙女なのか、亡霊なのか、人間なのか。目が利く人であれば必ず見分けられる。その上、『長恨歌』の中でこの節には、狡猾な言い方が多く使われている。「山在虚無缥缈間」とは、そこは俗世の境界であると言ふことであり、真にこのような海上の仙山が必ず存在しているというわけではない。「其中綽約多仙子」とは、たくさん女性の身を集めて獨居しているようではない。唐の女道士寺院は倡家に近いものなので、これは佳話とはならない。「中有一人字太真」と詠じ、前の句に「仙子多し」と云いながら、ここでわざと「中に一人あり」と云い、「人」という言葉をはつきり指摘している。「雪膚花貌参差是」とは、方士が行く以前から、すでに楊貴妃に会った人が存在するようで、彼女が住んでいる所が、どのような所か、想像するのは難しくないことである。方士が楊貴妃に会った場面、ちょうど楊貴妃が寝起きしたときである。『長恨歌伝』には、「碧衣云ふ、玉妃方に寝ぬ、請ふ少しく之を待てど。時に雲海沈沈として、洞天日晩れ、瓊戸重ねて闔じ、悄然として聲無し。方士屏息し足を斂め、手を門下に拱く。之を久しくして碧衣延き入れ」と描き、『長恨歌』では、「聞道漢家天子使、九華帳裏夢魂驚。攬衣推枕起徘徊、珠箔銀屏進遶開。雲鬢半偏新睡覺、花冠不整下堂来」と描いて

いる。『長恨歌伝』によつていえば、方士が楊貴妃を待つ時間かなり長い。『長恨歌』では、楊貴妃が起きるとき、非常に慌てているようだ。すでに「夢魂驚く」といつているからには、「雲鬢」、「花冠」の両句は金釵が横ざまにさされ、髪が乱れているのだ。そこに、言外の意味(弦外微音)があるのかどうか、私が敢えて妄りなことは言えない。

『長恨歌伝』が伝奇体であり、小説家の言はとも信用できるような正史ではない、しかし、白居易の歌行は確かに詩史の巨篇である。もし聞いたことが事実でなければ、本朝にも差し障りがあるのだから、事実無根で妄りに記録することがありえようか。少なくとも、白氏が確かに何か聞いたことがあり、さらにその聞いたことが情理に叶っているのだと信じたほうがよい。そうでなければ、古人にも通じにくかったところがあるといわなければならないだろう。私たちは方士が楊貴妃の魂を求め捜す話があったく架空のことではないと考えるならば、さらに一歩進んで、彼が楊貴妃に会ったかどうかのことについて考察するべきである。だから、使者を派遣して楊貴妃を探がさせることは一件であり、見つかったのかどうかは、まだ別の一件である。『長恨歌』や『長恨歌伝』によれば、このように詳細に明確に描き尽くしているから、実際に楊貴妃に会ったようである。しかしながら、これについては論じないでおこう。方士(しばらく方士としておこう)が持つて帰った明証は二つであり、一つ目は鈿盒金釵のこと、二つ目は天寶十年の密誓の言葉のことである。そもそも釵盒であればあるいは盗んだり拾ったりする可能性もあるが、(最近の人が「翠鈿地に委す」の句に拠つて釵盒の來源として挙げている、必ずしもそうとはいえない)。密誓のことは、憶測で作るのは非常に難しいことである。両文に見ると、『長恨歌伝』では、「夜殆ど半にして、侍衛を東西廂に休ませ、獨り上に侍る。上肩に凭つて立ち、

因りて天を仰ぎ、牛女の事に感じ、密かに互いに誓ふ。世世夫婦と為らんと願ふ……此れ君王獨り之を知る」と云う。『長恨歌』では、「七月七日長生殿、夜半無人私語時」と云う。「獨侍」と云い、「憑肩」と云い、「無人私語」と云うからには、方士が盗聴できるわけではないのである。盗聴も出来ないし、かつ憶測で作ることでもないのであれば、方士が確かにすでに楊貴妃本人に会ったのである。「天上人間會相見」については、ただ根拠のない來生の縁を結ぶことを云うだけで、李商隱が云う、「海外徒らに聞く、更に九州ありと、他生未だトせず此生休めん」の如く、別に何かの深意があるわけではない。「昭陽殿裏恩愛絶、蓬萊宮中日月長」とは、明らかに生別離のことを言い、死別していることを言っているのではない。まして楊貴妃が貴妃としての尊厳を持っていることさえ、風塵（戦乱）の劫乱から免かれないことで、これは閹宦の玷（宮廷の恥）であり、このことに對する恨もかなりあるようだ。だから文末の結びには、「天長地久有時盡、此恨綿綿絶無期」とあり、この恥辱が永遠に晴れないものだと言っている。そうでなければ、馬嵬坡の変において、ただ一人の婦人が死んだだけで、「長恨」を歌のタイトルとしているのは、一体何を言いたいというのか。

玄宗は楊貴妃が俗世間にいることを知っているがただ覆水盆に返らずであり、これは歴史に記載されたもので、問題にならない。まして『長恨歌伝』には次のように述べている、「使者還りて、太上皇に奏す。皇の心震悼し、日日豫（な）まず。其年の夏の四月、南宮に晏駕す」と。玄宗が聞いたことは本々良い知らせではなく、それでまもなく翌年に亡くなってしまった（肅宗寶應元年）。もしかしたら、楊貴妃が死んだのは、玄宗の後である。章實齋の考証によれば、その時楊貴妃も一人の嫗（年増であつてもまだこのように風情（あでやか）、揺れ動き溢れんばかりだ

つたとするが、これも異聞である。私が思うに、この人は清朝末の賽金花に大いに似ており、『彩雲曲』も實は『長恨歌』の嫡系である。ただこのような説を唱えてしまうと、煮鶴焚琴（良いものをだめにしてしまう）のような酷い諷刺になつてくる。

本文を整理すれば、実は非常に明白で、疑問がわくところが本に少ないのである。ただ傍証を欠いているので、遺憾である。杜甫の『哀江頭』にも楊貴妃のことを記載しており、「明眸皓齒 今何く在り 血は游魂を汚し歸りえず 清渭東流し劍閣深し 去ると住ると彼此消息無し」と、「去住」と言い、「彼此」と言い、何を指すのかわからない。たとえばこの説をもつて（この事を）解釈してみれば、前の兩句は楊貴妃がすでに亡くなったと思っているが、後の兩句には彼女がおそらくまだ死んでいないと疑っている。兩説が並存しているのだろうか。ただ舊注には、上句は楊貴妃の遊魂を指し、下句は玄宗が蜀（今の四川省である）へ御幸したことを指摘している。この注の説はかなり論理貫通しているが、これを曲解して参考として、佐証とするべきものではない。このことは秘密であり、その後だんだん世に漏れ流布してきて、たとえ白居易が当時このことを聞いたとしても、杜甫のときには必ずこの噂があつたかどうかはわからない。もしいつか他の記載が見つかることがあれば、さらに補充訂正して、人に認められるような説と成るだろう。

今日はただ本文の直接の証明があるだけで、他書の佐証はなく、ただ自分の疑問を伝達することだけで、人を説得することができない。要するに、当時実際に起こったことはどのようなことであつたのかと、伝聞して別のことになつてしまつたのかということである。ゆえに、この新説を持つて『長恨歌伝』を解釈すると十分に円満解決できるが、ただ自分が自分の説を上手にとりつくることにすぎないのであり、強いていえ

ば、歌、伝の本意を推測して得たにすぎない（これさえかなり誇張である）。もし、当時の秘密を探したいのであれば、陳鴻の言葉をもって答えるべきである、「世の中に伝わっていないことは、私が、開元天宝の遺民でないから、知りようがない」と。

〔附記一〕 玄宗と肅宗は先後して同年に亡くなった。肅宗が先に病氣になっており、玄宗の死はあまりにも突然のことであるから、後人は李輔国が玄宗の復位を恐れ彼を殺したのではないかと疑う。史書に、李輔国が玄宗を疑い恐れて、西内への引越しを迫り、高力士を放逐することを見ると、蜘蛛の糸や馬の蹄跡（微かな手がかり）がないとはいえない。唐の人の中にも疑っている人もおり、韋絢の『戎幕閑談』に次のように記している、「時に肅宗大漸、（李）輔国朝に専（政）す、西内に変故復た有らんと意ひしなり」と。このことと清朝末の徳宗と西后の死とは極めて似ている、また珍しい話である。

〔附記二〕 さらに宋代の王銍の『默記』<sup>注十二</sup>の上巻に、「元獻（晏元獻）は因みに僚属の為に唐小説を言へり。唐玄宗上皇と為り、西内に遷り、李輔国は刺客をして夜鐵槌を攜さえ其腦を撃たしむるに、玄宗は臥して未だ起きず、其腦に中り、皆聲声と作り、上皇驚いて刺客に謂ひて曰く、『我、固より命は汝が手に尽くと知る、然れども、葉法善嘗て我に玉を服するを勧め、今我の腦骨は皆玉と成れり、且つ法善は我に金丹を服することを勧め、今丹は首に有りて、固より自ら死に難し。汝、腦を破りて丹を取るべくんば、我乃ち死すべし』と。刺客其の言の如くし、丹を取るに乃ち死す」と。孫光憲の『續道録』<sup>注十三</sup>に云ふ、「玄宗將に死せんとして、云へり、『上帝我に命じて孔昇真人とならしむ』と。爆然として聲有りて、之を視て崩ぜり。亦微意なり」と。これも上節〔附記一〕

と一緒に参考しながら読むべきである。

一九二七年十一月十五日（原載『小説月報』一九二九年第二十卷第二期）

附録 兪平伯『論詩詞曲雜著』（上海古籍出版社刊 一九八三年）に

附載されている。

#### 與周良煦書（節録）（周良煦への返書 節録）

まず最初に『長恨歌』の書き方を明かにしておかねばならない。『長恨歌』は新樂府の『琵琶行』と異なり、婉曲的諷喻であり、直接の話ではない。すなわち、白居易の微言の意味を認識すべきである。冒頭の段には、まさに二つのポイントがある。

（一）「傾国」。「傾国」の本来の意味は決して美称ではなく、『詩經』の「哲婦傾城」<sup>注十四</sup>から始まり、周代について言うなら、則ち褒姒のことである。李延年の歌も、まったく賛美ではない。後に美人の代名詞に転義してから、貶め排斥する意味がすでになくなっており、白居易の詩（長恨歌）に「傾国を思ひ」と言っているのは、ただ「彼は一人の絶色の美人を探したい」と訳すしかなく、決して彼が国を滅ぼしたいのだとは言えない。下文にはさらに「御宇多年求不得」という句があり、意味がより一層明らかである。―ただ、「傾国」は決して「好事」ではなく、冒頭の句にこのように言っているのは、表現の面で非常に人目を引くし、深意がないはずはない。実は雙關語（掛詞）なのである。これこそは「長恨」の根源であり、いわゆる「入手摘題」（とりかかればまず主題をしっかりと握る）である。

（二）「養はれて深閨に在り人未だ識らず」。ただ史書に記載されてい

ることに背くだけではなく、さらに陳鴻の『長恨歌伝』での壽邸に関する話とも矛盾している。これは、微隠し秘めていることは疑いなく、いわゆる「国の悪を諱む」ということで、春秋の大義である。もし文章作法によるならば、却って別の意味がある。壽王のことは、決して唐の人は深く諱避することがなく、たとえば李義山の詩中にも二首がこのことについて触れている。但し、もし『長恨歌』が冒頭からこれをあからさまに示すならば、後の色々な恋愛話は話し続けられなくなり、たとえ話しても何の味気もないような気がする。微詞曲筆（ほのめかし）で諷刺をする、これこそはこの詩の特徴である。このような描き方が全篇に貫かれている。馬嵬の死について描くと、はつきりしていないし、仙山樓閣について描いても、ぼんやりとしてはつきりしていない。これはすべて同じ描きかたである。本意は勿論美色を好むことを戒め、禍乱の起る路を塞ぐこと（懲尤物、窒亂階）であるが、しかし、家庭内の醜聞は外へ出せず、国の悪事を暴露したりできない、それで毀誉褒貶を雑えて使い、美中に風刺が込められている。

何を「長恨」というのか。貴方の手紙では詩の最後の両句は詩人の結びの言葉であり、楊貴妃と結びつかないところがあるが、これは極めて正確で一体、詩人の本意は何であろうか。私の言いたいことはすでに前文に明らかにしたが、まだ説明が不十分でないかとも心配している。貴方の説では、天に昇っても比翼の鳥となれないし、地下にいつても連理の枝となれないために長恨となっており、これは楊貴妃の言葉でないといふものの、李・楊の二人の因縁から唱えた説となるが、私の考えではすべてがそうであるとはいえずに思ふ。文脈から言えば、当然これで認識すべきであり、そうではなければ、文章が連貫しなくなってしまう。つまり作者の本意についていえば、ただ二人の因縁に局限される

ものではない。そもそも男女の離合は、何ら大局と関係せず、まして李・楊の恋愛は、詩の冒頭においても、詩の中盤（安祿山）においても、すべて円満にはおさまらず、どうして詩人はこれほどまでに珍重して嘆き惜しむことを感じているのだろうか。思うに、別に深意が隠されている。私の考えでは実はこれは篇首と遙かに呼応して、宛曲して迂回しており、いわゆる「傾国」とは、字面にそって直解すればよく、これこそ本来の意味である。開元から天寶まで、極大の繁栄から突然の衰落まで、唐代においては確かに天地がひっくり返されるような局面である。安史の乱、続く藩鎮跋扈、このときから唐代の不振が始まり、南渡と異なっているが、周室の東遷とは非常に似ており、とりわけ關中に留まったことである。すなわち楊妃が褒姒に比べられ、安史は犬戎と似ており、華清賜浴は、驪山烽火と同じ場所である。これらを古人が凶地（不吉な場所）と称するのはもつともなことである。宮廷の辱と比べても、亡国の恨みははるかにひどく、これを「長恨」と呼んでも最もなことである。

『長生殿』という劇が作られてから、文・辭・音・律はすべて絶妙になったが、これは『長恨歌』の本意をまったく了解せず、「補恨」、「重圓」（再会）といっており、一体何の長恨があるのか。この劇が広く伝わってしまったが為に、歌意が一層分かりにくくなった。私の説が歡迎されないのはもつともなことであるにもかかわらず、貴兄は私の説を見捨てず、ただ独りでこの説を広めてくださり、誠に幸いなことである。

一九八一年六月二十日

（原載『晉陽學刊』一九八一年第六期）  
なお、周良煦の書信「『長恨歌』的恨在那里？」と「關於『長恨歌』的通信」とは、ともに『晉陽學刊』一九八一年第一期に掲載されているものである。（訳者附注）

注

注一

『録鬼簿 外四種』(元 鐘嗣成等著 上海古籍出版社 一九七八年) 卷上・白仁甫の條「梧桐雨 唐明皇秋夜梧桐雨」の記載がある。白朴について、『録鬼簿』に「白仁甫、文孝之子、人號蘭谷先生。贈嘉義大夫、太常卿、儀院太卿。峨冠博帶太常卿、嬌馬輕衫館閣情、拈花摘葉風詩性、得青樓、薄倖名。洗襟懷、剪雪裁氷。間中趣、物外景、蘭谷先生」とある。

注四 洪昇、字昉思、號稗畦、浙江錢塘人(今の杭州)。当時孔尚任とならび「南洪北孔」と称せられた。作品として『長生殿』、『回文錦』など伝奇の九篇がある。

注二

馬嵬の変、『旧唐書』の「卷九・本記第九・玄宗下・天寶十五年」に詳しい、「丙辰、次馬嵬驛、諸 頓軍不進……上令高力士詰之、迴奏曰、「諸將既誅国忠、以貴妃在宮、人情恐懼」上即令力士賜貴妃自盡、玄禮等見上請罪、命釋之。」また、同書の「列傳第四十六・陳玄禮」と「列傳第一・后妃上・玄宗貴妃楊氏」にも記載されている。

注六

『長生殿 第四十三齣 改葬』(同前掲注五)に、「**山坡羊**」惨悽悽一匡空墓、杳冥冥玉人何去。便故虛飄飄錦褥兒化塵、怎那硬撐釵盒也無尋處。空剩取、香囊猶在土、尋思不解緣何故、恨不得喚起山神責問渠。」とある。

注三

楊貴妃、新・旧唐書の記載は異なる所もあり、『新唐書』の「卷七十六・列傳第一・后妃上・楊貴妃」に、「玄宗貴妃楊氏、隋梁郡通守汪四世孫、徒籍蒲州、遂為永樂人……丐籍女官、號「太真」……」と記載されているが、『旧唐書』の「卷五十一・列傳第一・后妃上・玄宗楊貴妃」に、「玄宗楊貴妃、高祖令本、金州刺使。父玄琰、蜀州司馬、……時妃衣道士服、號曰「太真」、……」。なお、玉環の名については、両唐書ともに記載されていないが、樂史の「楊太真外傳」(『舊小説』十丁集一宋集 萬有文庫叢要五雲生主編 台灣商務印書館)に、「楊貴妃、小字玉環、宏農華陰人也」とある。

注七

『長生殿 第四十五齣 雨夢』(同前掲注五)に、「**越調過曲**」**〔五般宜〕**只為當日個亂軍中、禍殃慘遭、悄地向人叢裏、換粧隱逃、因此上流落久蓬飄。(生驚喜介)呀。原來楊娘娘不曾死、如今却在那裏。(小生、副淨)為陛下朝想暮想、恨繁愁繞、因此把驛庭靜掃、(叩頭介)望鑾輿幸早。說要把牛女會深盟、和君王續未了。」とある。

注八

評論家、不詳。

注九

『長恨歌』(0596)、『長恨歌伝』(白氏文集卷十二)。

注十 「琵琶行」(0603)、「琵琶引」ともいう。(白氏文集卷第十二)。

「連昌宮詞」、(元稹『元氏長慶集』二十三卷 樂府)。

注十一 『長生殿 第三十八齣 彈詞』に、「南呂一枝花」【梁州第七】の両首歌で貴妃の榮華から馬鬼の変の悲惨まで描いて、続いて【轉調貨兒郎】九首を用いて感歎を詠じている。

注十二 臨邛、唐劍南道に属する、今の四川省邛崃県。道士、「太真外伝」(同前掲注三)によると、仙術を学んだ方士、姓は楊、名は通幽という人である。

注十三 「相逢何必嘗相識、同是天涯淪落人」(「琵琶行」)

注十四 『韋端己詩校注』浣花集補遺二・秦婦吟(「唐」韋莊 江聰平箋注

台灣中華書局 中華民國五十八年)に、「……入門下馬若旋風、聲至傾囊如卷土。家財既盡骨肉離、今日垂年一身苦。一身苦兮何足嗟、山中更有千万家。朝飢山上尋蓬子、夜宿霜中臥荻花。妾聞此父傷心語、竟日闌幹淚如雨……」とある。「秦婦吟」は、

韋莊が唐僖宗中和三年三月に作った歌である。韋莊、字端己、唐

京兆杜陵人。當時に「秦婦吟秀才」の称号がある。この歌は、韋

莊の詩集『浣花集』及び『全唐詩』に記載されていない。詩中に

「内庫焼為錦繡灰、天街踏盡公卿骨」という句があるから、韋莊

が諱避するためにこの作品を自分の詩集に入れていなかった。清

光緒二十六年、敦煌石窟で発見された。敦煌の秦婦吟写巻はパリ

国立図書館と大英博物館に保存されている。この歌について、王

国維、羅振玉、陳寅恪、張蔭麟諸氏共に考証がある。

注十五 伝奇、伝奇小説である。名前は裴鏞の「伝奇」から得る。唐の士

大夫は、多く伝奇を作つて科挙のために「行巻」あるいは「温巻」

の作品として使う。このことについて、『唐代の科挙と文学』(程

千帆著 松岡榮志・町田隆吉訳 凱風社 一九八六年)一書に詳しい。

注十六 史筆、旧時、史官は権勢に阿らず筆を曲げずに事実を書くこと。

注十七 尺組、短い帯である。古代に佩玉や佩印の緩帯として用いられて

いる。今村与志雄訳(岩波文庫)では「三尺の白絹」と訳す。

注十八 『楊太真外伝』ともいう、宋代の樂史著(『舊小説』十冊丁集一宋

集 萬有文庫薈要 五雲生主編 台灣商務印書館)

注十九 『新唐書』卷一百二十一列傳第四十六陳玄禮條、「陳玄禮宿衛宮禁、

以淳篤自檢。帝嘗欲幸虢国夫人第、諫曰、「未宣勅、不可輕去就。」

帝為止。後在華清宮、正月望夜、復諫曰、「宮外曠野無備豫、陛

下必出游、願歸城闕。」帝不能奪。安祿山反、謀誅楊国忠闕下、

不克、至馬嵬、卒誅之。從入蜀。還、封蔡国公。及李輔国遷帝西

内、玄禮以老卒。」

注二十 六軍、ここは禁軍を指す。唐の禁軍は、龍武・神武・神策の三營

で、さらに各營は左・右軍と分けて、それで六軍と称する。『新

唐書』卷五〇志第四十兵禁軍、「高宗龍朔二年、始取府兵越騎、

步射置左右羽林軍……及玄宗以萬騎平韋氏、改為左右龍武軍……

末年、禁兵寢耗、及祿山反、天子西駕、禁軍從者裁千人……至德

二載、置左右神武軍、補元從、扈從官子弟、不足則取它色、帶品

者同四軍、亦曰「神武天騎」、制如羽林、總曰「北衙六軍」……」

の記載により、皇帝禁軍の六軍の編制は、唐肅宗至德二年から成

立したものである。

注二十一 『長生殿 第一出 傳概』(同前掲注五)に、「【沁園春】天寶明皇、玉環妃子、宿緣正當。自華清賜浴、初承恩澤。

長生乞巧、永訂盟香。妙舞新成、清歌未了、聲鼓喧闐起範陽。

馬嵬驛、六軍不發、斷送紅妝。西川巡幸堪傷、奈地下人間兩渺茫。幸遊魂悔罪、已登仙籍、迴鑾改葬、只剩香囊。證合天孫、情傳羽客、細盒金釵重寄將。月宮會、霓裳遺事、流播詞場。」の詞がある。原詞に「證合天孫、情傳羽客」と書いている。『長生殿箋注』（同前掲注五）の考証による、天孫は、織女星と指す、伝説で彼女は天帝の孫である。羽客は、元々道士の異名であり、ここで楊通幽を指す。

注二十二 唐の女道士寺院は倡家に近いものについて、唐人の詩文に多く見られる。陳寅恪の『讀鶯鶯傳』（陳寅恪文集之六『元白詩箋証稿』上海古籍出版社 一九七八年）に、「流傳至於唐代、仙（女性）之一名、遂多用作妖艷婦人或風流放誕之女道士之代称、亦竟有以之曰娼妓者、其例不遑悉举」という論述がある。詳しくことは、『歷代娼妓史』（筆記小説大觀 七編九冊 新興書局有限公司 中華民國六十四年）第五章「官妓鼎盛時代・第十二節 唐宋時代的女尼女冠」に記載している。

注二十三 『玉谿生詩集箋注』（唐）李商隱著 「清」馮浩箋注 上海古籍出版社 一九七九年）卷三に「馬嵬二首」、  
「冀馬燕犀動地來、自埋紅粉自成灰。君王若道能傾國、玉輦何由過馬嵬。」

「海外徒聞更九州、他生未卜此生休。空聞虎旅鳴宵柝、無復鷄人報曉籌。此日六軍同駐馬、當時七夕笑牽牛。如何四紀為天子、不及盧家有莫愁。」とある。

注二十四 閻壺、『說文解字』（漢）許慎 天津市古籍書店 一九九九年六月）による、本意は宮殿の道である。ここでは宮廷の耻の意を暗示している。玷は玷辱のこと。

注二十五 章學誠、字は實齋、浙江會稽の人、乾隆四十三年進士、官は国子監。章氏は、馬嵬の兵変時、玄宗は七十二歳、貴妃は三十八歳としてゐる。とすれば、玄宗は七十九歳で崩御し、貴妃は少くとも四十五歳以上となるだろう。（『章氏遺書』外編卷三・丙辰劄記「楊妃傳」條。『章學誠遺書』文物出版社一九八五年）。

注二十六 寶金花、本名趙彩雲、蘇州の妓女。十四歳にして狀元洪鈞の妾となる。このことについて、劉半農・商鴻達『寶金花本事』の日本語訳本『寶金花』（竹内好 生活社 昭和十七年）と『中国現代文学選集1 清末・五四前夜集 孽海花』（増田涉編 松枝茂夫訳 平凡社 昭和三十八年）に詳しい紹介がある。

注二十七 「彩雲曲」、詩人樊樊山（名は増祥）が寶金花のために作った歌である。

注二十八 『杜工部詩集』（唐）杜甫著 中華書局香港分局 一九七二年）卷一古詩五十首、「少陵野老吞聲哭、春日潛行曲江曲。江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲為誰綠。憶昔霓旌下南苑、苑中萬物生顏色。昭陽殿裏第一人、同輦隨君侍君側、輦前才人帶弓箭、白馬嚼齧黃金勒。翻身向天仰射雲、一箭正墜雙飛翼。明眸皓齒今何在、血汚遊魂歸不得。清渭東流劍閣深、去住彼此消息。人生有情淚落臆。江水流花豈終極。黃昏胡騎塵滿城、欲往城南忘南北。」

注二十九 『錢注杜詩』（唐）杜甫著 「清」錢謙益箋注 中華書局香港分局 一九七三年）卷一「哀江頭」の箋に、「箋曰…此詩興哀于馬嵬之事。專為貴妃而作也。蘇黃門曰。哀江頭。即長魂歌也。斯言當矣。清謂劍閣。寓意于上皇貴妃也。玄宗之幸蜀也。出延秋門。過便橋。渡渭。自清渭以西。劍閣以東。豈非蛾眉宛轉。血汚遊魂也。……」とある。『讀杜心得』（清）浦起龍 中華書局 一九

六一年十月)に、この詩について、「舊謂…諷玄・肅父子、朱謂…憶明皇在蜀、總屬曲說。蘇黃門云…「哀江頭」即「長恨歌」也。」「長恨歌」費數百言而成。杜則不然。潘耒駁之曰…「長恨歌」本因「長恨歌」而作、公則安得預知其事……」とある。

注三十 韋絢、唐京兆人、字文明。『舊小說』(萬有文庫叢要 五雲生主編 台灣商務印書館) 八冊乙集六唐集「戎幕閑談」八則・李輔國條。

注三十一 德宗、清朝の光緒帝。西后、文宗道光帝の皇后慈禧太后である。光緒帝が亡くなった僅か一日後、慈禧太后(西太后)も亡くなった。後人は慈禧太后が光緒帝を殺したと推測している。

注三十二 王銍、宋の潁人、字性之。『宋元人說部叢書』下冊「默記」二卷 卷上 晏元獻條(中文出版社 一九八〇年)。

注三十三 孫光憲、宋の貴平人、字孟文。『續通鑑』は、『續通鑑』の校正ミスと思われる。『通鑑』十五卷、原闕三卷。唐馬總撰、孫光憲續。民国四年長沙葉氏夢萊廬排印。

注三十四 『詩經』大雅「瞻卬」「瞻卬昊天、則我不惠。孔填不寧、降此大厲。……此宜無罪、女反収之。彼宜有罪、女覆說之。哲夫成城、哲婦傾城。懿厥哲婦、為梟為鴟。婦有長舌、維厲之階。……」

注三十五 褒姒、周幽王の寵妾。詳細は、『史記』周本紀に記載。

注三十六 『漢書』(班固撰 顏師固注 中華書局 一九六二年) 卷九十三・佞幸傳第六十三、「李延年、中山人、身及父母兄弟皆故倡也。……延年善歌、為新變聲。是時上方與天地諸祠、欲造樂、令司馬相如等作詩頌。延年輒承意弦歌所造時、為之新聲曲。……及李夫人卒後、其愛弛、上遂誅延年兄弟宗族。」また李延年の歌とは、「北方有佳人、絕世而獨立。一顧傾人城、再顧傾人國。寧不知、傾人與傾國、佳人難再得。」(『全漢三國晉南北朝詩』第一冊 丁

福保編 中華民國五十七年 藝文印書館)を指す。

注三十七 李商隱の「馬嵬二首」を指す。同前掲注二十三。

注三十八 『統資治通鑑』(清)畢沅編著 古籍出版社 一九五七年) 南宋紀一〇三卷高宗建炎三年金天會七年(一一二九年)、「時事出倉卒、朝廷儀物、太常少卿季陵……至瓜州、敵騎已逼、陵舍舟而陸、親事官李寶為敵所驅、遂失太祖神主、于是太學諸生從帝南渡者凡三十六人。」また『靖康要錄』(宋史資料萃編第一輯 趙鈺寒主編 文海出版社 中華民國五十六年)は、このことについて詳しく記載している。

注三十九 『史記』(中華書局 一九五九年) 周本紀第四、「平王立、東遷于維雒邑、辟戎寇、平王之時、周室衰微、諸侯彊并弱、齊、楚、秦、晉始大、政由方伯。」

注四十 『史記』(同上掲) 周本紀第四、「三年、幽王嬖愛褒姒……幽王為燧燧大鼓、有寇至則舉燧火、諸侯悉至。至而無寇。褒姒乃大笑、幽王說之、為數舉燧火、其後不言、諸侯益亦不至。」